

平成 26 (2014) 年度イカナゴ伊勢・三河湾系群の資源評価

責任担当水研：増養殖研究所（山本敏博、鴨志田正晃）

参画機関：愛知県水産試験場漁業生産研究所、三重県水産研究所

要 約

伊勢・三河湾における過去 36 年間の年間漁獲量（農林統計）は 699 トン（1982 年）～28,777 トン（1992 年）、推定加入資源尾数は 14 億尾（1982 年）～1,028 億尾（1992 年）の間で大きく変動している。2014 年の資源水準については、推定加入資源尾数が 292 億尾であったことから中位と判断した。また、直近 5 年間（2010～2014 年）の加入資源尾数が約 300 億尾以上の水準を保っており、動向は横ばいと判断した。

本系群は漁獲量の 90%以上を 0 歳魚が占め、再生産成功率（残存親魚尾数に対する翌年の加入資源尾数）の高低によってその年の漁獲量が増減する。従前より親魚のとり残し方策が検討されてきたが、1992 年頃より 10 億尾をとり残す管理方策がとられる様になった。その後、2007 年漁期から始まった資源回復計画の目標設定では、愛知、三重両県の検討、漁業者の同意を経て合意形成が図られた。また、山田（2011）は資源回復計画の設定目標について、親魚を 20 億尾とり残すことで翌年の加入資源尾数 300 億尾以上を確保する科学的根拠を与えた。現在、とり残し資源量一定方策として産卵期における禁漁と終漁期の設定が行われている。また、漁期前、漁期中に本事業による調査を通じて加入資源尾数、残存資源（翌年の親魚）尾数を把握するシステムを確立し、愛知、三重両県と漁業者の合意によって、親魚 20 億尾以上をとり残す終漁日を決定している。

資源管理基準は、親魚を 20 億尾以上とり残す、とり残し資源量一定方策を用いる。ABC_{limit} は、2012～2014 年の平均加入資源尾数から 20 億尾をとり残し、その値に 2012～2014 年の漁獲物の平均体重を乗じて算出し、15,200 トンとした。また、不確実性を考慮して安全率 0.8（標準値）を乗じた 12,160 トンを ABC の目標値（ABC_{target}）とした。なお、本系群は漁期中に DeLury の方法を用いた加入資源尾数の推定に基づく管理手法が確立されている。

	2015年ABC	資源管理基準	F値 (/年)	漁獲割合
ABClimit	15.2千トン	Bfishable	-	-
ABCtarget	12.2千トン	0.8・Bfishable	-	-

ABCの各値は2015年1～12月の値で示す。

$Bfishable = (Nave\ 3\text{-yr} - Nescape) \times Wave\ 3\text{-yr}$

Nescape=20 (億尾)

Nave 3-yr：過去3年間（2012～2014年）の加入資源尾数（億尾）の平均値。

Wave 3-yr：過去3年間（2012～2014年）の漁獲物の平均体重（g）の平均値。

年	資源量 (千トン)	漁獲量 (千トン)	F値	漁獲割合
2012	-	14.9	-	-
2013	-	11.0	-	-
2014	-	13.1	-	-

漁獲量は1～12月の値で示す。

2012年漁獲量は農林統計確定値、2013、2014年漁獲量は県統計確定値である。

水準：中位 動向：横ばい

本件資源評価に使用したデータセットは以下のとおり

データセット	基礎情報・関係調査など
新規加入量	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼稚魚ネットを用いた漁期前分布量と加入群組成の把握（愛知県、三重県） ・ 船曳き網による漁期前分布量調査（愛知県）
漁獲動向・加入資源尾数・累積総漁獲尾数・残存親魚尾数	<ul style="list-style-type: none"> ・ 漁期中は日別漁獲量、漁獲努力量、イカナゴの体長、体重の測定データの集計（愛知県、三重県） ・ 船曳き網の標本船調査（愛知県） ・ 最近2年間の県別漁獲統計（愛知県、三重県） ・ 県別漁獲統計（農林水産省）
残存親魚量	<ul style="list-style-type: none"> ・ 夏眠魚分布、年齢組成調査（愛知県、三重県） ・ 夏眠魚の産卵数の推定（三重県）

1. まえがき

伊勢・三河湾は、東北海域、瀬戸内海とともに日本における主要なイカナゴ漁場である(図1)。この海域のイカナゴ資源は、愛知、三重の両県によって利用されており、主に仔稚魚が船びき網によって漁獲されている。伊勢・三河湾の年間漁獲量(農林統計)はこの36年間では699トン(1982年)~28,777トン(1992年)の間で大きく変動しており、2,000トンを超える不漁年(1982年、1998年、2000年、2009年)がみられる。そのため、イカナゴ漁獲量の高位安定のための資源管理が望まれていた。平成18年度から資源回復計画の対象種に指定され、終漁時残存資源尾数の確保、保護区の設定、保護育成期間の設定の措置が実施され、実効的な資源管理が継続して実践されている。資源回復計画は平成23年度で終了したが、同計画で実施されていた措置は、平成24年度以降、新たな枠組みである資源管理指針・計画の下、継続して実施されている。

2. 生態

(1) 分布・回遊

イカナゴは沖縄を除く日本各地、朝鮮半島、遼東半島、山東半島の沿岸に分布する。浮遊仔稚魚期が数ヶ月に及ぶものの、夜間に海底の基質中に潜ることや夏眠といった行動習性を持つため、生息場所は底質が砂や砂礫からなる海域に限られる。そのため回遊範囲は比較的狭いと考えられている。伊勢・三河湾、渥美外海で漁獲されるイカナゴは、これらの海域で再生産を行う一つの独立した資源である(船越1991)。

内湾で成長しながら過ごした稚魚・未成魚は湾奥から湾口へ移動し、成長とともに分布水深は次第に深くなる。

イカナゴは夏季に水温が高くなると潜砂し、ほとんど活動しない夏眠と呼ばれる状態となる。伊勢湾では通常、水温が18度以上になる6月頃から夏眠が始まる。夏眠は12~1月の産卵期まで続く。夏眠場所は、水深20m前後で底質の粒径が1~2mmの粗砂の海域に形成される。貧酸素水塊の発生や粒径の小さい砂泥の被覆などのため、現在では湾内には夏眠に適した場所はほとんどなく、伊勢湾口域から渥美外海に限られている(船越1991)。夏眠中は全く摂餌しないが、夏眠後半の11月頃から急速に性成熟が進行する。

(2) 年齢・成長

孵化直後の仔魚は体長が約4mmである。伊勢湾口付近で孵化した後の浮遊仔魚は、潮流に乗って拡散され、一部が湾内に輸送される。例年3月には体長が35mmに達し、漁獲加入する。成長速度はふ化後1ヵ月までは0.23mm/日(山田1998)、それ以降は年によって変動するが0.4~0.7mm/日と推定されている(糸川1978a)。6月に入ると体長約8cm以上(平均10~11cm)となり夏眠が始まるため、漁獲は夏眠前の個体に限られる。橋本(1991)によると、満1歳で体長約11cm、満2歳で13cmであり、寿命は2~3年と考えられている。雌雄による体長の差異はほとんどない。

当歳時の夏眠中にほとんどの個体で生殖腺が発達し、12~1月に産卵する。成熟年齢は1

歳である。

(3) 成熟・産卵

1 産卵期間中に雌 1 個体が生み出す卵の数は、1 歳魚（平均体長 96.5mm）で平均 6,252 粒、2 歳魚（平均体長 121.2mm）で平均 12,697 粒である（糸川 1979）。

産卵期は 12 月から 1 月までで、水温 12～16 度で産卵が行われる（糸川 1980）。伊勢湾の湾口部付近から渥美外海の礫砂の海底で産卵する。卵は淡黄色の球形で、直径 0.7～1.0mm の付着沈性卵である。孵化に要する日数は水温によって変化するが、伊勢・三河湾の標準的な冬季の水温では約 10 日である。性比は 1 対 1 である。

産卵群の年齢組成は、年によって大きく異なり、満 1 歳が 90%以上を占める年が多いものの、満 2 歳が主となる年もある（富山ら 1999）。2006 年度より夏眠魚の耳石を用いた年齢査定が行われており、1 歳、2 歳以上の割合は年によって変動している。なお、1 歳魚より 2 歳魚の方が、産卵の時期が早いと報告されている（船越 1991）。

(4) 被捕食関係

餌は主に動物プランクトンである。カイアシ類が主であるが、ヨコエビ類、ヤムシ類、アミ類も食物となっている。伊勢湾では珪藻類などの植物プランクトンも摂食されていることが報告されている（関口 1977）。

イカナゴは、他の生物の重要な食物になっていることが知られており、仔稚魚期には多様な浮魚類やヤムシ類に、未成魚および成魚期にはヒラメ等多くの底魚類に捕食されている（山下ら 1993）。

3. 漁業の状況

(1) 漁業の概要

伊勢・三河湾のイカナゴは、船びき網漁業とすくい網漁業で漁獲されている。三重県のたもすくい網漁業は伝統的漁業として知られている。操業漁船数は解禁日時点で 166 隻、約 650 隻である。イカナゴ船びき網漁業は知事許可漁業である。主漁場である伊勢湾は、愛知、三重両県の船びき網漁船が利用権を有する入会漁場となっている。

漁獲対象は、2～3 月が仔稚魚（シラス）、4～5 月が未成魚、夏眠後の 1～2 月が産卵を終えた親魚（ボウコウナゴ）である。仔稚魚と未成魚は船びき網で漁獲され、親魚はすくい網で漁獲されている。この他、親魚や翌年まで生存した 1 歳以上の個体が小型底びき網によっても漁獲されている。全漁獲量のうち、90%以上が、2～3 月の漁期開始後の約 2 週間で水揚げされる（船越 1991）。また親魚に対する漁獲については、ほとんどが産卵後のイカナゴを対象としており、その漁獲尾数は、親魚資源尾数の 0.7～2.2%程度であると推定されている（山田 未発表）。なお、本系群における当年の漁獲は、上述の通り、遅くとも 6 月までには終漁することが多い。したがって、直近年の漁獲量は 2014 年の県統計が利用できる。

(2) 漁獲量の推移

2014年の漁獲量は13,050トンであった。1974年に2.7万トン台であった年間漁獲量はその後大きく減少し、1982年にはわずか699トンにまで落ち込んだ。1983年以降は再び増加したが、その後は1,507トン（2000年）～28,777トン（1992年）の間で大きな変動を繰り返している（表1、図2）。

(3) 漁獲努力量の推移

伊勢・三河湾の主要漁業であるイカナゴ船びき網漁業は、漁期前調査によって解禁日が、漁期中の市場調査によって終漁日が設定されている。したがって、漁獲努力量の指標として、解禁日、終漁日および期間中の出漁日数を表2に示す。2014年の出漁日数は、愛知県35日間、三重県36日間であった。なお、出漁日数は資源状態や流通状況に応じて各年で調整されるため、4日（2009年）から80日（1992年、三重県）の間で変動している。

4. 資源の状態

(1) 資源評価の方法

漁期中のイカナゴは湾外との移出入が少なく、さらに漁業が仔稚魚（シラス）を対象として短期間の漁獲に集中しているため、DeLuryの方法による加入資源尾数推定が有効であることが、糸川(1978b)によって確かめられている。なお、DeLury法は、漁獲量と漁獲努力量が把握でき、漁場加入した資源が漁期中を通じて漁場外との移出入が無く、短期間に漁獲される特徴を持った資源の資源量（指標値）算出に用いられる一手法である。イカナゴは愛知県、三重県の市場で水揚げされるが、全水揚げ市場において全漁期にわたって漁獲量、漁獲努力量（出漁統数）データを出漁当日中に集計する。同時に両県内の主要市場で行う市場調査において漁獲物の一部をサンプリングし、体長、体重を測定し、平均体重を算出することにより、日別漁獲尾数が算出される。各県で算出された日別漁獲尾数を加算することにより伊勢・三河湾の漁獲尾数を求める。これらのデータから算出した各操業日の漁獲尾数および出漁統数データをDeLuryの方法に当てはめ、加入資源尾数と残存資源尾数を推定する。また、上記方法で推定された残存資源尾数と翌年の加入資源尾数を用いて再生産関係を検討する。

本系群の資源管理では、漁期前、漁期中に本事業による調査を通じて加入資源尾数、残存資源（翌年の親魚）尾数を把握するシステムを確立しており、愛知、三重両県と漁業者の合意によって、親魚20億尾以上をとり残す終漁日を決定出来る現時点では最適なシステムが機能している。資源管理基準は平成26年度ABC算定のための基本規則I. 基本的考え方、漁獲方策に基づき、親魚を20億尾以上をとり残す、とり残し資源量一定方策を用いた。ABClimitは、2012～2014年の平均加入資源尾数から20億尾をとり残し、その値に2012～2014年の漁獲物の平均体重を乗じて算出した。また、再生産成功率の不確実性を考慮して、ABClimitに安全率0.8（標準値）を乗じてABCtargetとした（補足資料1）。

なお、本系群は漁獲量の90%以上を0歳魚が占める。また、漁期は長くて1月～6月に

限られ、本評価票作成時点で 2015 年の ABC 算定に掛かる数値（2014 年の漁獲量、資源量指数値（推定加入資源尾数））が確定している。山田（2011）は本系群の再生産関係について Beverton-Holt 型モデルの妥当性を示した（Beverton-Holt 型モデルは再生産関係を説明するために用いられる。親魚量が適性量を下回ると新規加入量が急激に減少するが、親魚量が多いほど新規加入量は高止まりする特徴を持つモデル。）。しかし、再生産成功率は年によって大きく変動し、再生産成功率の最も高かった 1982 年の 185 と最も低かった 2006 年の 0.91 では約 200 倍の差が認められる（図 3）。また、再生産成功率を増減させるメカニズムは依然として不明点が多く、Beverton-Holt 型モデルを用いた資源量予測は現時点では不確実性が高いと考えられた。

(2) 資源量指標値の推移

資源量指標値には、加入資源尾数を用いた。

2014 年における DeLury の方法による加入資源尾数の導出結果を示す（図 4）。今漁期は、3 月 2 日に解禁となった。解禁日の CPUE（尾／統／時間）は約 390 万尾（漁獲量は約 337 トン）を記録して、その後漁獲は漸次減少した。操業区域内での魚影がわずかとなったことから、愛知県では 5 月 14 日に、三重県では 5 月 15 日に終漁となった。両県の合計漁獲量は 13,050 トンであった。CPUE と累積漁獲尾数の関係から推定された加入資源尾数は 292 億尾、加入資源尾数から累積総漁獲尾数を引いて求められた残存資源尾数（とり残し尾数）は 48 億尾となった（表 2）。また、例年終了後に夏眠魚の調査（中村ら 1997）が実施されているが、2014 年の 6 月に行われた同調査では、来年の親魚のとり残し尾数が確保出来ていることが確認された。

DeLury の方法によって推定された各年の加入資源尾数は 14 億尾（1982 年）～1,028 億尾（1992 年）の間で、70 倍以上の変動幅を示す（図 5）。この加入資源尾数に対する当年の漁獲尾数の関係をみると、高い寄与率で一回帰関係となっている（図 6）。このことは、漁獲割合が安定していること、漁期開始日（解禁日）の設定等の成長乱獲を抑制する措置が効果的に機能していることを示している。

とり残した 0 歳魚の残存資源尾数に対する翌年の推定加入資源尾数の関係を図 7 に示す。データのばらつきが大きいものの、残存資源尾数が 20 億尾以上であると翌年の加入が著しく少ないというケースがなくなるといった傾向が認められる。なお、2013 年は残存資源尾数を 87 億尾確保し、2014 年の加入資源尾数が 292 億尾であったことから、再生産成功率は 3.36 であった。

(3) 資源の水準・動向

資源の水準は、過去 36 年間の加入資源尾数のうち、突出して多かった 1992 年の加入資源尾数（1,028 億尾）を除いた 35 年間で判断した（図 5）。過去 35 年間の加入資源尾数の最大値（2006 年：651 億尾）と最小値（1982 年：14 億尾）の差を三等分し、14～226 億尾を低位、226～439 億尾を中位、439 億尾以上を高位の基準とした。2014 年は加入資源尾数

が 292 億尾と推定されたことから水準は中位と判断した。

資源の動向は直近 5 年間（2010～2014 年）の加入資源尾数の推移から判断した（図 5）。2010 年の加入資源尾数は 504 億尾と高かったものの、2011 年以降は安定して約 300 億尾以上の水準を保っていることから、動向は横ばいと判断した。

5. 2015 年 ABC の算定

(1) 資源評価のまとめ

2014 年の加入資源尾数は 292 億尾と推定される。また、直近 5 年の加入資源尾数も約 300 億尾以上の水準を維持している。2007 年以降、再生産成功率が 1.0 を下回る極端に悪い年はみられず、資源の状態は安定していると考えられる。しかし、再生産成功率を増減させるメカニズムは依然として不明な点が多く、持続的な漁業を行うために、資源管理基準（とり残し資源量一定方策）に即した実効的管理体制を維持していく必要がある。

(2) ABC 並びに推定漁獲量の算定

ABC の算定にはとり残し資源量一定方策に基づいて ABC を算定した。ABClimit は、2012～2014 年の平均加入資源尾数から 20 億尾をとり残し、その値に 2012～2014 年の漁獲物の平均体重を乗じて算出し、15,200 トンとした。また、不確実性を考慮して安全率 0.8（標準値）を乗じた 12,160 トンを ABC の目標値（ABCtarget）とした。

$$ABC_{limit} = B_{fishable}$$

$$ABC_{target} = ABC_{limit} \times \alpha$$

$$B_{fishable} = (N_{ave\ 3-yr} - N_{escape}) \times Wave\ 3-yr$$

$$N_{escape} = 20 \text{ (億尾)}$$

ここで Nave 3-yr は 2012～2014 年の平均加入資源尾数（ N_{2012} : 321 億尾、 N_{2013} : 302 億尾、 N_{2014} : 292 億尾、Nave 3-yr : 305 億尾）、Wave 3-yr は 2012～2014 年の漁獲物の平均体重（ W_{2012} : 0.555g、 W_{2013} : 0.510g、 W_{2014} : 0.535g、Wave 3-yr : 0.533g）である。

本系群の ABC（2015 年）は、その漁業の状況から再生産成功率の高低によって、安全率を考慮してもなお変動する場合がある。本系群は漁期中に DeLury の方法を用いた加入資源尾数の推定に基づく管理手法が確立されている。

	2015 年 ABC	資源管理基準	F 値 (/年)	漁獲割合
ABC _{limit}	15.2 千トン	B _{fishable}	-	-
ABC _{target}	12.2 千トン	0.8・B _{fishable}	-	-

ABC の各値は 2015 年 1～12 月の値で示す。

$$B_{fishable} = (N_{ave\ 3-yr} - N_{escape}) \times Wave\ 3-yr$$

(3) ABC の再評価

本系群の ABC 算定は本年度が初年度となることから、ABC の再評価は次年度から実施する。

6. 資源管理の方策

伊勢湾のイカナゴ資源管理では、加入乱獲抑制を主体として、成長乱獲抑制を部分的に導入している（富山 2002）。成長管理においては、事前モニタリングによって把握されるその年の成長状況に応じて、解禁日を前後に調整する。また資源量が少なく予想される年には、とり過ぎによる乱獲を防ぐ意味でも、解禁日を遅らせたり、漁期前半に休漁日を多くし、漁獲努力量を下げながら、CPUE の変動をチェックするなどのきめ細かい管理を実践している。また 2001 年より、仔稚魚の分布調査結果を基に、孵化直後の仔魚が分布する海域に保護区を設定している。市場への水揚げが停止し関連加工業にも影響が及ぶ禁漁期の設定に比べ、部分的な保護区の設定という方策は、現場でも受け入れ易い（富山 2003）。一方、必要に応じて早期に湾外に移動する大型で良質な親魚を増大させるため、魚体が加工用には大きく餌料用には小さいため市場価値の低い体長 6cm 前後の時期に、保護育成期間（実質的な禁漁期）を設定している。

加入管理においては、とり残し資源量一定方策を用いており、産卵期における禁漁による親魚数確保方策に加え、親魚確保のための終漁期の設定を行うようになっている。伊勢湾のイカナゴ資源では DeLury 法が有効であることが示されており、同法を用いて判断がなされている。この方法では、終漁時残存資源尾数の確保が目標となっている。

以上の取り組みをベースとして、伊勢湾・三河湾のイカナゴは平成 18 年度から資源回復計画の対象種に指定され、終漁時残存資源尾数の確保、保護区の設定、保護育成期間の設定の措置が実施され、実効的な資源管理が継続的に実践されている。伊勢湾・三河湾のイカナゴの資源回復計画は親魚尾数を確保することによって加入資源尾数を高位安定させ、安定的な漁業生産の維持を目指すことを中期的管理方針とする。具体的には、十分な漁獲量と親魚量の確保が期待される加入資源尾数 300 億尾水準を維持し、終漁時残存資源尾数 20 億尾以上の確保を目標としている。なお、資源回復計画は平成 23 年度で終了したが、同計画で実施されていた措置は、平成 24 年度以降、新たな枠組みである資源管理指針・計画の下、継続して実施されている。

資源回復計画における終漁時残存資源尾数 20 億尾以上の数値については、残存資源尾数が 20 億尾を下回らなければ翌年の加入資源尾数が著しく少なくなる年がなくなることを根拠としている（図 7）。また、山田（2011）が行った再生産曲線の評価では、Beverton-Holt 型モデルの妥当性が示された。そのモデルでは、残存資源尾数が 20 億尾であれば翌年の初期資源尾数が 340 億尾に達し、その後は残存資源尾数の増加と共に飽和水準（約 400 億尾）に漸近することが示されている。“終漁時残存資源尾数 20 億尾以上”の数値は山田（2011）の評価からも支持される。しかし、本来残存資源尾数は再生産関係を基に判断するべきであろう。またその際には、親魚の体のサイズ（年齢を含む）や体重といった卵数に関わる

情報や生物・物理的な環境要因を組み入れていくことが望まれる。親魚の分布量を把握するために、両県で空釣り調査が10年以上行われている。DeLury法で推定された残存資源尾数に対して、空釣り調査で推定された密度指数は有意に相関しており ($P < 0.01$, 図8)、本調査によって親魚の分布量、年齢組成、産卵量が推定可能であると考えられる。しかし、2008年4~7月に実施された空釣り調査では、曳網1km当たりの採集尾数が100尾以下となり、過去18年間の最低水準であった(図8)。このように推定残存資源尾数(0歳魚)に対して夏眠魚の密度が低い年もある。また、実際の親魚は前述のように1歳魚(産卵時に満2歳となる魚)も含まれていることに加え、肥満度も産卵の可否を左右する(山田ら1999、山田・久野2000)。これらの条件を加味して、産出される産卵数を推定したところ、2008年の推定産卵数は0.2兆粒であり最も少ない値となった(三重県未発表データ、図9)。また産卵数に対する翌年の加入資源尾数の関係を調べたところ、明瞭な相関関係がみられないものの、産卵数が8.5兆粒以上ならば加入資源尾数が100億尾を下回るような極端な不漁年がない。再生産成功率を増減させるメカニズムについては、依然として不明な点が多い。加入資源尾数を高位に安定させるためには、2歳魚(産卵時に満2歳となる魚)を含めた産卵数の確保が一つの重要な方策と考えられる。一方、2014年は2歳魚の割合が約1.5%と推定されていたが、産卵が長期に渡って継続したと考えられた。産卵が長期に及んだ要因は不明であるが、新規加入が継続したことが2014年の推定加入資源尾数の増加に影響した。なお、2014年の夏眠魚調査における採集尾数は約659尾/kmで十分な親魚がとり残されたと判断出来る。一方、2014年は夏眠魚に占める優良な1歳魚(産卵時に満2歳となる魚)以上の割合が3.8%であり、また0歳魚の肥満度は2013年と比べても大きい。今後の成熟過程と産卵数を注視していく必要がある。

7. 引用文献

- 船越茂雄(1991)伊勢湾のイカナゴ資源管理. 水産振興, 東京水産振興会, 283, 1-58.
- 山田浩且(1998)伊勢湾産イカナゴのふ化特性と外部栄養への転換. 日本水産学会誌, 64, 440-446.
- 橋本博明(1991)日本産イカナゴの資源生態学的研究. J. Fac. Appl. Biol. Sci., 30, 135-192.
- 糸川貞之(1978a)伊勢湾産イカナゴの資源研究-1, 当歳魚の成長について. 昭和51年度三重県伊勢湾水産試験場年報, 151-156.
- 糸川貞之(1978b)伊勢湾産イカナゴの資源研究-2, DeLuryの方法による資源量推定. 昭和51年度三重県伊勢湾水産試験場年報, 156-164.
- 糸川貞之(1979)伊勢湾産イカナゴの資源研究-3, イカナゴのよう卵数について. 昭和52年度三重県伊勢湾水産試験場年報, 70-74.
- 糸川貞之(1980)伊勢湾産イカナゴの資源研究-4, イカナゴの産卵について. 昭和53年度三重県伊勢湾水産試験場年報, 30-398.
- 中村元彦・船越茂雄・向井良吉・家田喜一・石川雅章・柳橋茂昭(1997)伊勢湾産イカナゴの夏眠場所. 愛知水試研報告, 4, 1-9.

- 富山実・山田浩且・中田薫(1996)冬季伊勢湾における低次生産構造(1)イカナゴの生残とプランクトン量・組成. 1996年度水産海洋学会研究発表大会講演要旨集, 71-72.
- 富山実・船越茂雄・向井良吉・中村元彦(1999)伊勢湾産イカナゴの成熟、産卵と水温環境. 愛知水試研報告, 6, 21-30.
- 関口秀夫(1977)伊勢湾のプランクトン食性魚イカナゴの摂餌について. 日本水産学会誌, 43, 417-422.
- 山下洋・山本和稔・長胴幸夫・五十嵐和昭・石川豊・佐久間修・山田秀秋・中本宣典(1993)岩手県沿岸における放流ヒラメ種苗の被食. 水産増殖, 41, 497-505.
- 富山実(2002)伊勢湾のイカナゴ資源管理における資源評価. 平成11年度資源評価体制確立推進事業報告書-事例集-, 水産総合研究センター, 32-46.
- 富山実(2003)2001年漁期における伊勢湾産イカナゴの資源回復について. 愛知水試研報告, 10, 37-44.
- 山田浩且(2011)伊勢湾におけるイカナゴの新規加入量決定機構に関する研究. 三重水研報, 19, 1-77.
- 山田浩且・西村昭史・土橋靖史・久野正博(1999)伊勢湾産イカナゴ親魚の栄養状態と再生産力. 水産海洋研究, 63, 22-29.
- 山田浩且・久野正博(2000)夏眠期における伊勢湾産イカナゴのへい死条件. 三重水技研報, 8, 1-5.



図1. 分布

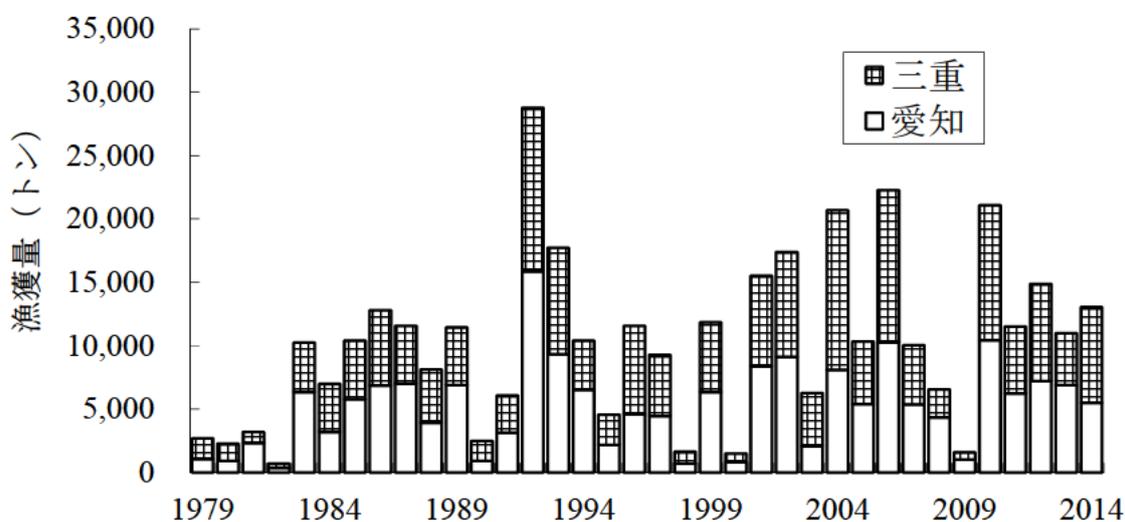


図2. 伊勢・三河湾におけるイカナゴの漁獲量の経年変化 1979～2012年は農林統計確定値、2013、2014年は県データ。

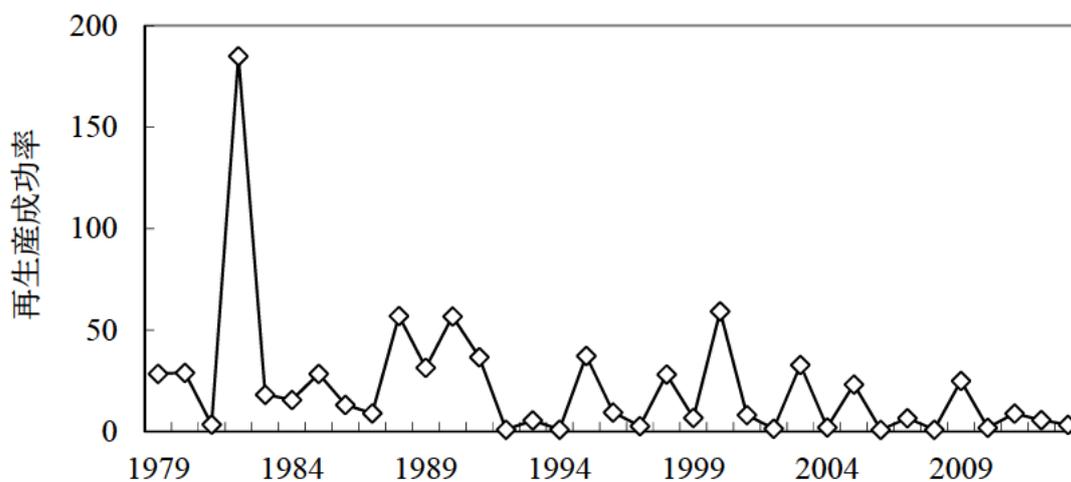


図3. 伊勢三河湾におけるイカナゴの再生産成功率（翌年の加入資源尾数/残存資源尾数）の経年変化（1979～2013年）

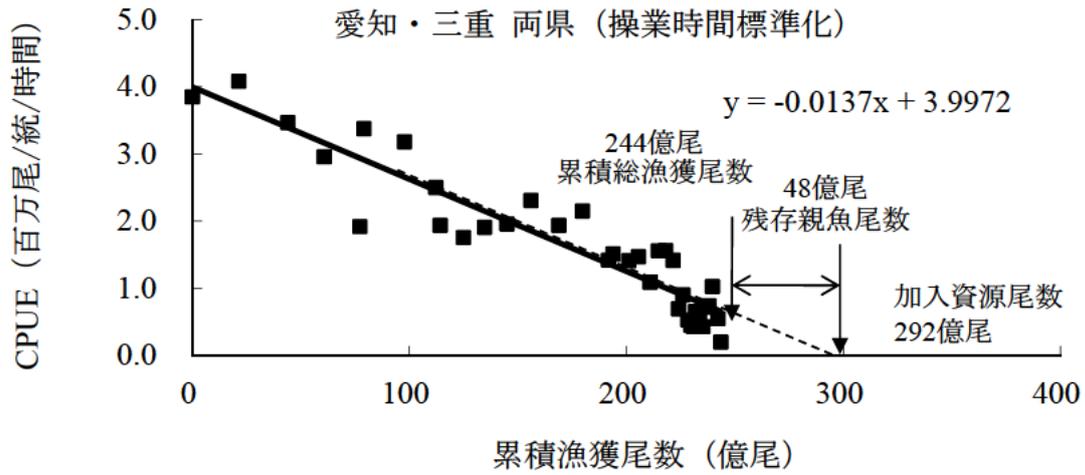


図4. 2014年漁期中の船びき網による累積漁獲尾数に対するCPUEの関係

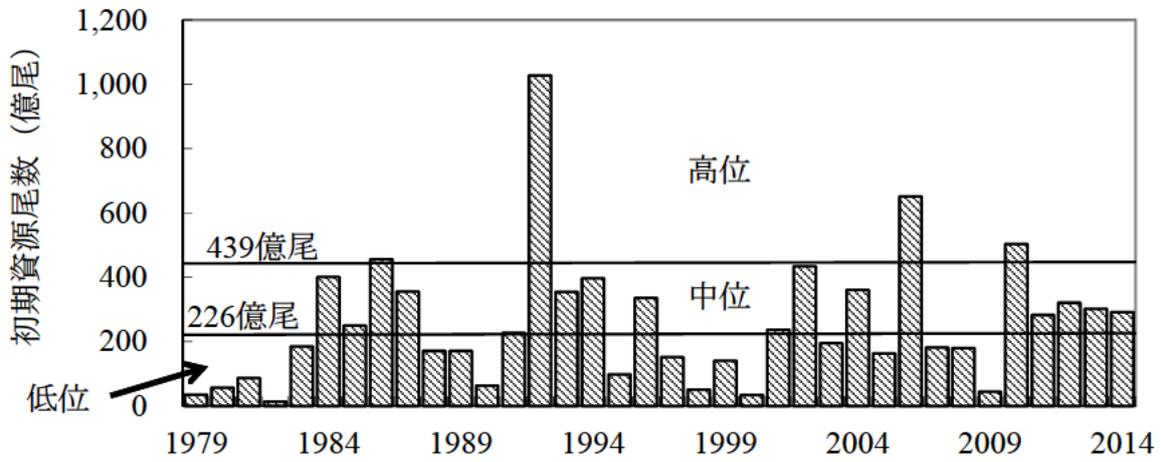


図5. 伊勢・三河湾におけるイカナゴの推定加入資源尾数の経年変化 (1979~2014年)

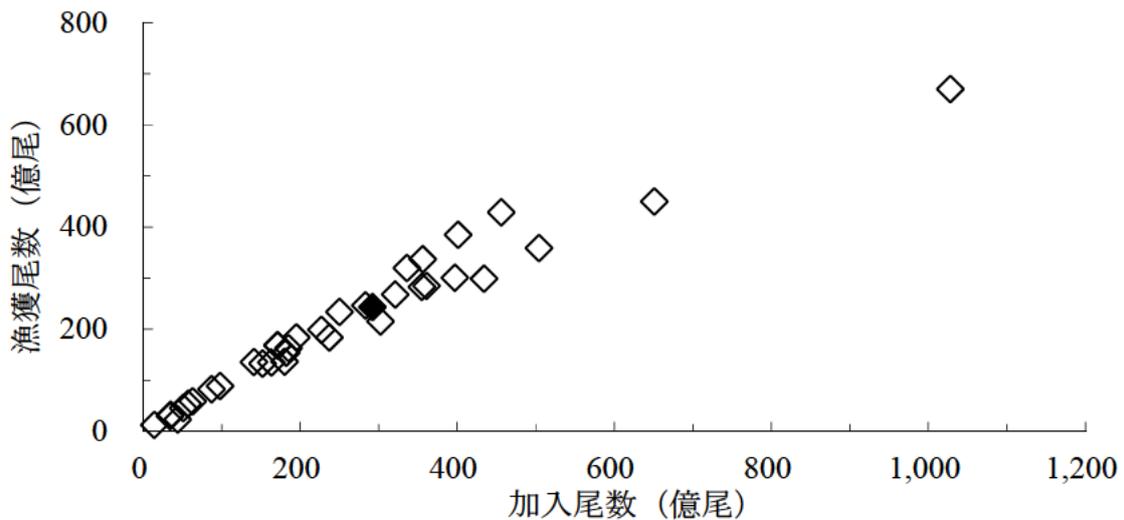


図6. DeLury法によって推定された伊勢・三河湾におけるイカナゴの0歳魚加入資源尾数に対する漁獲尾数の関係 (1979~2014年) 黒抜きは2014年を示す。

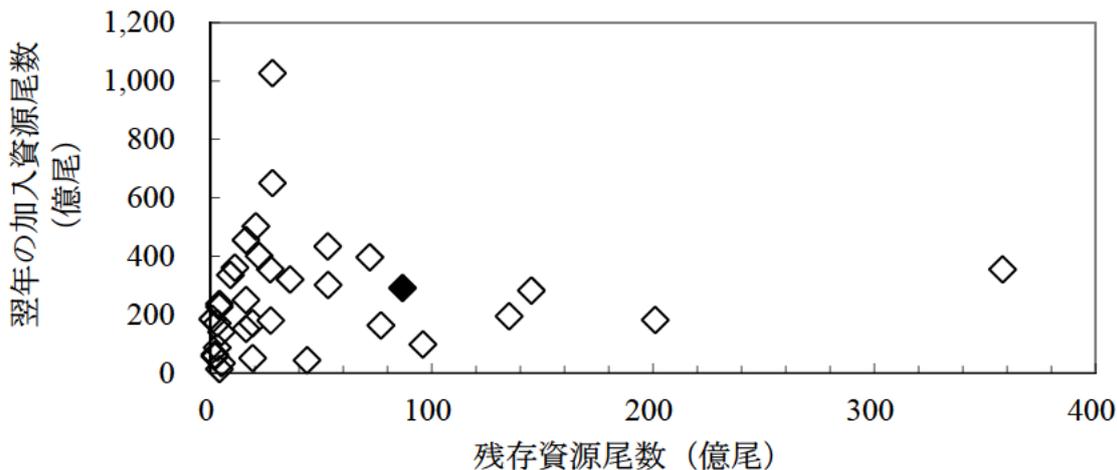


図7. 伊勢三河湾におけるイカナゴの残存資源尾数に対する翌年の加入資源尾数の関係 (1979～2013年：35年間) ◇：1979～2012年(34年間)、◆：2013年。

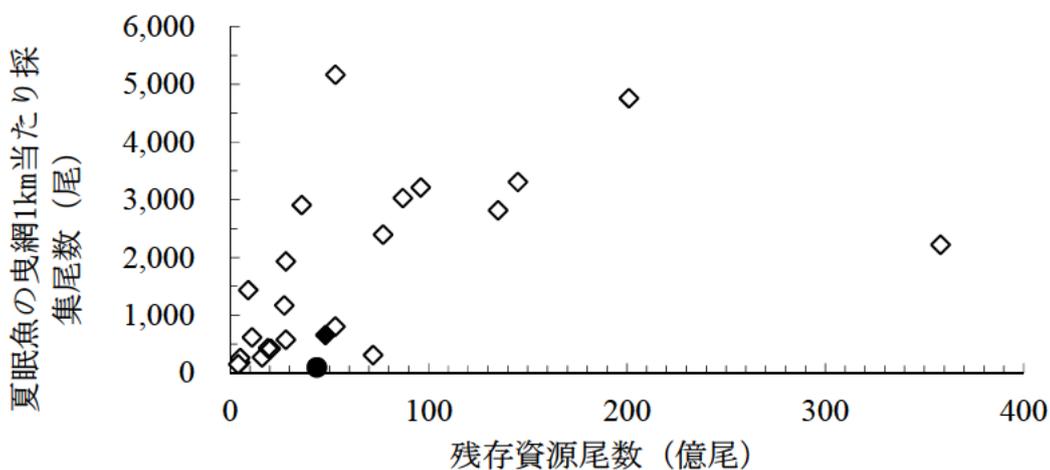


図8. 残存資源尾数に対する夏眠魚採集密度の関係 (1991～2014年) ◆：2014年、●：2008年。

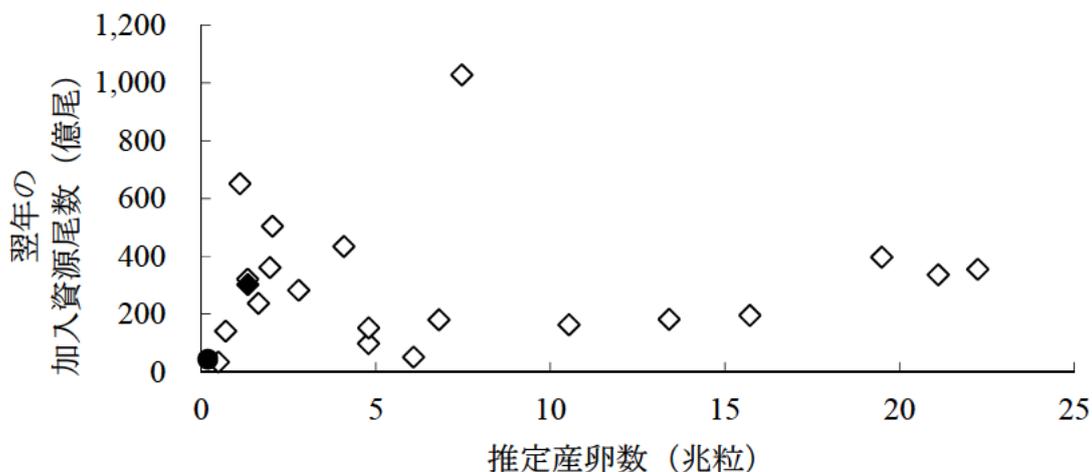


図9. 伊勢・三河湾におけるイカナゴの推定産卵数に対する、翌年の加入資源尾数の関係 (1992～2013年) ●：2008年、◆：2013年。

表1. 伊勢・三河湾におけるイカナゴの漁獲量（トン）および推定された加入資源尾数、漁獲尾数、残存資源尾数（億尾）（1979年～2012年は農林統計確定値、2013、2014年は県データ）

年	漁獲量	加入資源尾数	漁獲尾数	残存資源尾数
1979	2,703	35	33	2
1980	2,276	57	54	3
1981	3,191	87	83	4
1982	699	14	13	1
1983	10,252	185	163	22
1984	6,995	401	385	16
1985	10,413	250	234	16
1986	12,814	456	429	27
1987	11,579	356	337	19
1988	8,131	171	168	3
1989	11,457	171	169	2
1990	2,501	63	59	4
1991	6,078	227	199	28
1992	28,777	1,028	670	358
1993	17,742	355	283	72
1994	10,405	397	301	96
1995	4,564	98	89	9
1996	11,576	336	320	16
1997	9,290	152	133	19
1998	1,644	51	46	5
1999	11,852	141	136	5
2000	1,507	34	30	4
2001	15,522	237	184	53
2002	17,395	434	299	135
2003	6,280	195	184	11
2004	20,696	361	285	77
2005	10,339	163	135	28
2006	22,290	651	450	201
2007	10,044	182	154	27
2008	6,561	180	137	44
2009	1,590	44	23	21
2010	21,095	504	359	145
2011	11,519	283	247	36
2012	14,875	321	268	53
2013	10,996	302	216	87
2014	13,050	292	244	48

表2. 伊勢・三河湾におけるイカナゴ船びき網漁業の出漁日数 -:未集計

年	解禁月日	終漁月日		出漁日数	
		三重	愛知	三重	愛知
1979	3/5	3/29	4/13	24	-
1980	3/6	5/19	3/31	48	-
1981	3/5	4/26	3/31	27	-
1982	3/11	3/31	3/31	13	-
1983	3/1	4/26	4/10	36	-
1984	2/29	5/17	4/8	34	-
1985	3/11	5/20	4/3	57	-
1986	3/10	5/20	4/25	59	-
1987	3/5	5/24	3/30	56	-
1988	2/25	4/30	3/30	49	-
1989	2/20	5/15	3/15	61	-
1990	3/2	3/30	3/22	17	-
1991	3/11	4/12	3/25	23	-
1992	2/28	6/22	6/23	80	-
1993	2/21	5/9	4/28	44	-
1994	3/14	4/29	4/10	24	-
1995	3/29	5/14	5/7	20	-
1996	3/3	5/19	5/3	39	-
1997	3/6	4/30	4/20	27	-
1998	2/22	3/30	3/26	12	-
1999	3/7	5/13	4/30	31	24
2000	3/6	3/31	3/31	7	7
2001	3/4	5/24	5/20	39	35
2002	2/24	5/30	5/30	40	41
2003	2/22	4/29	4/7	29	15
2004	3/4	5/28	5/26	36	34
2005	3/8	5/29	4/24	39	18
2006	3/9	6/18	5/31	50	36
2007	2/27	4/30	4/30	34	31
2008	3/2	4/21	4/30	29	28
2009	3/8	3/25	3/25	4	4
2010	3/3	6/9	6/9	54	43
2011	3/11	5/26	5/25	29	29
2012	3/8	6/7	5/27	40	30
2013	2/28	6/2	3/31	35	15
2014	3/2	5/15	5/14	36	35

補足資料1 使用したデータと資源評価の関係

